

I 結核発生動向の概要

結核発生動向の概要

大阪市の全結核罹患率（人口 10 万対）は、1999（平成 11）年 107.7 から 2020（令和 2）年 21.0 まで減少した。一方全国の罹患率は 1999（平成 11）年 34.6 から 2020（令和 2）年 10.1 まで減少していた。大阪市の喀痰塗抹陽性肺結核罹患率は、1999（平成 11）年 34.7 から 2020（令和 2）年 8.5 まで減少し、全国の罹患率は 1999（平成 11）年 11.4 から 2020（令和 2）年 3.7 まで減少していた。全結核罹患率・塗抹陽性肺結核罹患率ともに、全国と比べ大阪市の方が減少率は大きかったが、それぞれ 2.1 倍、2.3 倍と依然として高い状況が続いている。

結核死亡率（人口 10 万対）をみると、全国では 1999（平成 11）年 2.3 から、2020（令和 2）年 1.5 へ減少しているが、2002 年以降はほぼ横ばいで推移している。一方大阪市では 1999 年（平成 11）年 6.9 から年々減少していたが 2010（平成 22）年増加に転じた。その後、2013（平成 25）年 4.8 をピークに再び減少傾向となり、2015（平成 27）年は 3.4 であった。その後 2016（平成 28）年からは再び増加に転じ、2017（平成 29）年 4.6 をピークに 2020（令和 2）年は 3.3 まで減少した。高齢者結核の割合が高いことが原因の一つと考えられるが、変動が大きく今後の動向をみていく必要がある。

大阪市では 2016（平成 28）年から、70 歳以上の結核患者の占める割合が 52.8% になり新登録結核患者全体の半分を超えた。2020（令和 2）年は 57.1% とさらに高齢者の占める割合が増加した。大阪市および全国ともに、結核患者の高齢化が進んでいる。年齢階級別罹患率をみると、大阪市の 2020（令和 2）年は、60 歳代、70 歳代の罹患率はそれぞれ 29.8、46.5 であり、80 歳以上の罹患率が 84.2 と最も高かった。全国と比較すると、特に 60 歳代、70 歳代の罹患率が高く、それぞれ 3.6 倍と 2.9 倍であった。

大阪市 24 区の罹患率をみると、2011（平成 23）年に西成区においてはじめて 200 を下回り、2020（令和 2）年は 90.4 まで減少しているが依然として 24 区で最も罹患率が高かった。結核健診による患者の早期発見と確実な治療、適切な接触者健診の実施と LTBI 治療の推進が重要である。

外国出生結核患者数は、全国的に増加傾向にあるが、大阪市では 2020（令和 2）年は 49 人で、前年の 50 人と大きく変化はなかった。新登録結核患者のうち外国出生結核患者の占める割合は全国的に増加傾向にあり、大阪市では 2020（令和 2）年は 8.5% で前年の 7.1% から増加した。20 歳代の結核患者においては特に外国出生結核患者の占める割合が高く、大阪市では 2011（平成 23）年 23.1% から、年々増加傾向にある。2018（平成 30）年は大阪市 72.9%、全国の 70.4% と、はじめて大阪市が全国を上回ったが、2020（令和 2）年は大阪市 62.8%、全国 71.3% と 2019 年に続き全国を下回った。全国的に 20 歳代の結核患者の過半数を外国生まれが占める状況にあり、日本語学校健診による患者の早期発見や医療通訳派遣事業などの患者支援が引き続き重要である。

